

千年王国の必然性



【新改訳 2017】ゼカリヤ書 14 章 9 節、16 節

- 9 【主】は地のすべてを治める王となられる。その日には、【主】は唯一となられ、御名も唯一となる。
- 16 エルサレムに攻めて来たすべての民のうち、生き残った者はみな、毎年、万軍の【主】である王を礼拝し、仮庵の祭りを祝うために上って来る。

ベレーシート

●前回は、キリストの地上再臨の前に起こる大患難時代とイスラエルの民族的回心に至るプロセスについて、主に、マタイの福音書 24 章から学びました。獣と呼ばれる反キリストによる未曾有の大患難の時を、聖書は「終わりの日」と言っていることもお話ししました。今回は、大患難の終わりにキリストが地上再臨された後に、この地上に実現する「千年王国」を取り上げます。「千年」という限定された期間を、象徴的な意味でなく、字義通りに受けとめ、神の歴史のマスタープランにおいてこの「千年王国」がなぜ必要なのか、千年王国とはどのような時代なのか、どのような祝福があるのかを正しく理解する必要があります。なぜなら、クリスチャンは七年間の患難時代に入る前にキリストの空中再臨によって携挙されていますが、患難時代の最後に、反キリストの軍勢を滅ぼしてイスラエルを救うためにキリストが地上再臨するときには、花嫁である教会もキリストの花嫁として共にこの地上に来て、千年の間、王である祭司としての働きをするように定められているからです。ですから、クリスチャンも、この「千年王国」について知っておかなければならないのです。

●旧約において、神がアブラハムおよびイスラエルの民と交わした契約、ダビデに対して交わした契約、さらに多くの預言者たちが語った預言には、いまだ成就していない預言が数多くあります。それらの契約や預言は、「千年王国」において成就するのです。それゆえ、「千年王国」についての学びをすることで聖書における数多くのピースがうまくつながり、ジグソーパズルの全体像がはっきりと見えてくるのです。旧約の歴史や預言者たちが語っていたことや、イエシュアがこの世に来られて語られた「御国の福音」の意味がより明確にされるのです。神の歴史におけるマスタープランを正しく理解することは重要です。たとえば、詩篇の瞑想をするとき、最初の第 1 篇はそれほど難しくなくても、次の第 2 篇を読んでもつまずく人は多いはずですが、なぜなら、どのように理解してよいのか分からないからです。詩篇 2 篇には 神のマスタープランとしての「**主**の定め」が啓

示されています。つまり、そこにはキリストの初臨と再臨、そしてその後に来る「千年王国」におけるキリストによる支配が啓示されているのです。

●マタイの福音書 24 章と 25 章にはイエシュアが語られた終末についての教えがまとめられています。その教えの中には、A.D.70 年のエルサレム神殿の破壊とエルサレムの町の滅亡の出来事、そしてキリストの空中再臨による教会の携挙のこと、そして七年間の患難時代のこと、キリストの地上再臨と千年王国のこと、さらに最後の審判といった出来事が、時系列ではなく、一枚の絵を描くように記されているのです。私たちが星座を観る時、そこには無数の星が見えます。しかし、その一つひとつの星はそれぞれ遠く離れており、星の誕生した時も異なるので、私たちはすでに消滅してしまった星をも見ているかもしれません。遠く離れて観ているために、空間軸も時間軸もない同一平面上にある一つのピクチャーとして見ているので、聖書も同様に、やがて起こることの時間軸を無視して一枚の絵を描くように記されたものを私たちは読んでいるのです。しかし将来に起こる出来事は必ず時間軸の中で起こってくるため、すでに実現したこと、まだ実現していないこと、将来のどのあたりで実現するのかといった神のご計画全体の大枠を整理して知っておく必要があります。そうでなければ、私たちは、パウロの言うように、「空を打つような拳闘」をしたり、「決勝点がどこかわからないような走り方」をしたりすることになってしまいます。そうしたことを避けるためにも、これから起こることを正しく理解する必要があるのです。

●「千年王国」についての学びをすることによって、聖書全体に記されている多くの事柄がバラバラではなく、すべてつながってくることを発見するようになります。それだけでなく、確かな希望から来る、ぶれることのない、かつ、自信をもった生き方ができるようになると信じます。いわば「千年王国」は神の歴史におけるマスタープランの要石なのです。それをどのように理解するかが神のご計画を理解する上できわめて重要なのです。そこで、早速、千年王国についての学びをしていきたいと思いますが、聖書のテキストはヨハネの黙示録 20 章です。

1. 「ヨハネの黙示録」の 20 章の重要性

●まず、ヨハネの黙示録 20 章 1～6 節までを読んでみましょう。そこには「千年王国」の始まりについて記されています。ちなみに、7～15 節は「千年王国」の終わりについて記されています。今回は、特に「千年王国」の始まりに注目したいと思います。

【新改訳 2017】ヨハネの黙示録 20 章 1～6 節

- 1 また私は、御使いが底知れぬ所の鍵と大きな鎖を手にして、天から下って来るのを見た。
- 2 彼は、竜、すなわち、悪魔でありサタンである古い蛇を捕らえて、これを千年の間縛り、
- 3 千年が終わるまで、これ以上諸国の民を惑わすことのないように、底知れぬ所に投げ込んで鍵をかけ、その上に封印をした。その後、竜はしばらくの間、解き放たれることになる。
- 4 また私は多くの座を見た。それらの上に座っている者たちがいて、彼らにはさばきを行う権威が与えられた。また私は、イエスの証しと神のことばのゆえに首をはねられた人々のたましいを見た。彼らは獣もその像も拝まず、額にも

手にも獣の刻印を受けていなかった。彼らは生き返って、キリストとともに千年の間、王として治めた。

5 残りの死者は、千年が終わるまでは生き返らなかった。これが第一の復活である。

6 この第一の復活にあずかる者は幸いな者、聖なる者である。この人々に対して、第二の死は何の力も持っていない。

彼らは神とキリストの祭司となり、キリストとともに千年の間、王として治める。

●「千年」ということばが聖書の中で出て来るのは、ここ黙示録の 20 章だけです。7 節も含めると、「千年」ということばが 6 回も繰り返されて使われています。重要な事柄にもかかわらず、全聖書の中でこの 1 章しか出てこないのです。「千年」という期間にもかかわらず、こんなわずかなスペースでしか語られていないことに、ある人々はその出来事の信ぴょう性を疑います。しかし、この黙示録 20 章の偉大な貢献は、旧約時代、新約時代で語られてきた神の約束(特に、イスラエルの民に対して語られた多くの約束)の成就とその期間、完成された御国の期間が、「千年」という限定された期間であることが啓示されている点です。他の箇所では決して言われていないこの事実を、黙示録 20 章が記しているということです。神が約束された「メシア王国」のことが多く語られていたとしても、その期間が「千年」であるということを啓示しているのは、ヨハネの黙示録 20 章だけなのです。それだけでも、この箇所は神のマスタープランを知る上で価値のある重要な箇所と言えます。また別の言い方をするならば、この章の理解が、聖書の理解、神の歴史のマスタープランの理解を決定づけるとも言えるのです。

●このことへの理解がないばかりに、私たちは死んだ後のことがよく分からないということになります。「死んだら、天国に行く」という考えは、今日、マスコミを通して、この世の考え方になって来ています。しかしその天国がどういう所なのか、多くの人々が確信をもって語る事ができないのが現状です。実は、クリスチャンたちも同じレベルです。「死んだら、天国へ行く」ということだけですべてを済ませてしまっているとすれば、神の備えられたすばらしい福音を語り伝える事はできません。いわば煙に巻かれている状態なのです。

(1) サタンの幽閉

●「千年王国」はサタンの幽閉から始まります。1 節に「**御使いが底知れぬ所の鍵と大きな鎖を手にして、天から下って来るのを見た。**」とあります。「見た」のは使徒ヨハネ自身です。「御使い」の名前は記されていませんが、この「御使い」が王であるキリストから遣わされていることは間違いありません。なぜ、その御使いが底知れぬ所の鍵と大きな鎖をもって天から下って来たかといえば、2 節にあるように、「悪魔でありサタンである古い蛇」を捕えて、千年の間縛り、底知れぬ所に投げ込み、鍵をかけ、そこを封印するためでした。「古い蛇」とは、創世記 3 章に出て来る「野の生き物のうちで、ほかのどれよりも賢い」存在であった蛇、サタンが蛇に変身してエバに近づいて騙した、あの蛇のことです。

●黙示録 19 章 19 節以降を読むと分かるように、ヨハネはすでにハル



マゲドンと呼ばれる一「獣と地の王たちとその軍勢が集まって、馬に乗る方とその軍勢に戦いを挑む」(新改訳 2017)―最後の戦いを見ました。その後で獣は捕らえられ、また、獣の前でしるしを行い、それによって獣の刻印を受けた人々と獣の像を拝む人々とを惑わした偽預言者も彼といっしょに捕らえられています。このふたりは、硫黄の燃える火の池に、生きたままで投げ込まれたとあります。つまり、「獣」と呼ばれる反キリストと、「獣」を支える「偽預言者」は、やがて千年の後にサタンも投げ込まれる「火の池」にすでに先に投げ込まれてしまっています。その大御所である**サタン(悪魔)**は、千年間、「底知れぬ所」に幽閉され、その後、そこから一時解放された後に、「獣」と「偽預言者」のいる「火と硫黄の池」(地獄)に投げ込まれます(20:10)。千年王国の最後の審判において、すべての者が死からよみがえりますが、「いのちの書に記されていない者はみな、火の池に投げ込まれます(20:15)。「火の池」とは、「第二の死」とも呼ばれ、「昼も夜も、世々限りなく苦しみを受ける」所なのです(20:10)。

(2) サタンの幽閉の目的

●サタン(悪魔)を幽閉した目的は、3節にあるように「千年が終わるまで、これ以上諸国の民を惑わすことのないように」(新改訳 2017)するためでした。しかしそれは消極的な面です。積極的な面としては、神が約束された御国をこの地上で実現させるためです。神の民イスラエルに対してなされてきた約束が完全に成就するためです。また、神を信頼して信仰を貫き通した者たちに、地上においてさばきを行う権威を与えるためです。さらには、かつて地上にあったエデンの園が回復されたその祝福を味わわせるためなのです。このことについては、また別の時に扱いたいと思います。

●「千年王国の祝福」については黙示録 20 章で取り扱われていません。なぜなら、その多くが旧約聖書の中に啓示されているからです。それらを一つひとつ丁寧に学ぶことにより、より一層、この「千年王国」のすばらしさを知ることができるのです。しかしながら、そのすばらしい千年間に及ぶ祝福も、その後に訪れる「新しい天と新しい地」という永遠の御国に比べると、前座的な位置づけでしかないということです。

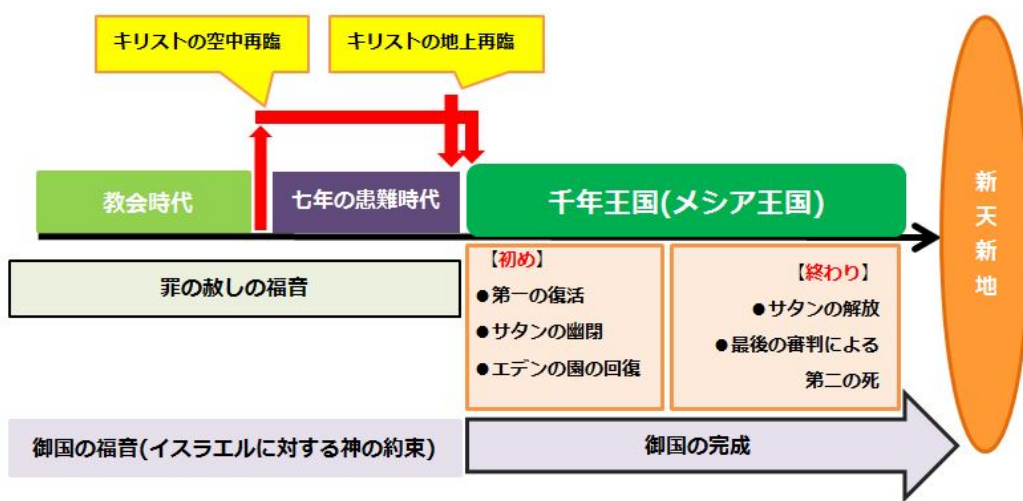
●限定された「千年王国」の目的は、神が神の民イスラエルに対して約束されたことに対して、どこまでも真実な方であるということをおかしする期間なのです。それは神にとっても、神の民にとっても至福の喜びです。また、教会もその喜びを分かち合うため招かれているのです。

(3) 「第一の復活」と「第二の死」が意味すること

●黙示録 20 章 6 節に「第一の復活にあずかる者は幸いな者、聖なる者である。」とあります。「第一の復活」ということばの他に、「第二の死」ということばが出てきます。「**第一の復活**」とは、千年王国で生きるために、新しい朽ちることのないからだを与えられることを言います。携挙された教会はすでに朽ちることのないからだに変えられていますから、文句なしに、この「第一の復活」に与っています。黙示録 20 章でいう「第一の復活」に与った人とは、患難時代、大患難時代を括り抜けて信仰を貫き、殉教した人々(異邦人、およびイスラエルの民)のことで、キリストの再臨の時に、この「第一の復活」に与ることができます。イエシュアはこの「第一の復活」の初穂となられたのです(I コリント 15:23)。初穂とは、次に続く収穫があることを意味していま

す。

●「**第二の死**」ということばが出てきます。「第一の復活」に与った者には、それは「何の力もない」とあります。第一の死に対しては、よみがえりのいのちによって復活し、朽ちない新しいからだを与えられています。しかしそうでない者は、千年王国の終わりの大審判が行われるときに死からよみがえります。しかし、それは「第二の死」に定められるためです。つまり、いのちの書にしるされていない者たちは、獣と偽預言者、そしてサタンがいる同じ火の池に投げ込まれるのです。これが「第二の死」と言われるもので、永遠に苦しみ続けるところに置かれるということなのです。これほど恐ろしいことはありません。決して、無(Nothing)の世界ではありません。これまでのことをまとめると、以下の図のようになります。



2. 「千年王国」は「御国の完成」とイコール

(1) 千年王国は、旧約で預言されていたメシア王国のこと

●バプテスマのヨハネも、そして御子イエシュアも、「悔い改めなさい。天の御国が近づいた」と言って「御国の福音」を宣べ伝えられました。ヨハネもイエシュアも、いわば旧約で約束されたことがこの地上で実現(完成)されるために、この世に遣わされた存在です。彼らが語り、またイエシュアの弟子たちが語った福音は、「御国の福音」でした。別の言葉で言うなら、「**メシア王国の福音**」です。それはメシアが主権をもって樹立する可視的な地上における神の王国です。ところが、メシアであるイエシュアが当時のイスラエルの民によって拒絶されたために、その実現は延期されることになりました。その間、奥義としての「教会」が誕生して、神の救いの恵みとしての「罪の赦しの福音」が伝えられることで、異邦人もキリストの花嫁としての祝福を受けるようになります。このこともすでに神の奇しいご計画の中にあっただのですが、実際は奥義として隠されていました。それゆえ、パウロは異邦人に対して「神の恵みの福音」をあかしすると同時に、神のご計画全体にかかわる「御国の福音」を余すところなく伝えていたのです(使徒 20:24, 27)。

●「千年王国」は神がイスラエルの民に約束された「御国の福音の成就(完成)」のあかしであり、また同時に、キリストの教会もその祝福にあずかる特権が与えられています。いわばイスラエルの民と共同の相続財産を受けているのです。

(2) 千年王国の統治形態

【新改訳 2017】ヨハネの黙示録 20 章 4 節

また私は多くの座を見た。それらの上に座っている者たちがいて、彼らにはさばきを行う権威が与えられた。また私は、イエスの証しと神のことばのゆえに首をはねられた人々のたましいを見た。彼らは獣もその像も拝まず、額にも手にも獣の刻印を受けていなかった。彼らは生き返って、キリストとともに千年の間、王として治めた。

●4 節で「また私は多くの座を見た。それらの上に座っている者たちがいて、彼らには**さばきを行う権威**が与えられた。・・・彼らは生き返って、キリストとともに千年の間、**王として治めた**」とあり、6 節では「彼らは**神とキリストの祭司となり**、キリストとともに千年の間、**王として治める**」と記されています。「彼ら」とは、イスラエルの民であり、また獣と呼ばれる反キリストの大患難に屈せずに殉教した人たちも含まれます。彼らは、王という立場で、御国においてなんらかのさばきを行う地位に着かせられます。異邦人を多く含む「教会」の立ち位置も、同じく王であり、祭司としての務めを果たしますが、イスラエルの民はエルサレムを中心とした形でその立場に着くと考えられます。「千年王国」においては世界の中心はエルサレム(シオン)です。世界の諸国の民は、王の王、主の主であられるキリストを礼拝するために、エルサレムに集まります(イザヤ 2:2~4)。

●千年王国の統治形態は、民主主義ではなく、メシアであるイエシュアによる、「王の王、主の主」による専制君主制による統治です。メシアの統治は全世界に及びますが、その権威の委譲は、イスラエルに対してのものと異邦人に対してのものとの二つがあります。前者はエルサレムを中心として(この時代はエルサレムが世界の中心となります)、後者は世界の諸国においてなされます。

- A. メシア・イエシュア ⇒ よみがえった王(君主)ダビデ⇒ イスラエルの 12 部族
- B. メシア・イエシュア ⇒ 教会時代の聖徒たち、大患難をくぐり抜けた聖徒たち ⇒ 異邦人諸国

●千年王国においてダビデがイスラエルの王として復活させられるならば、当然、ダビデの仮庵も復活します。アモスが預言したように、「その日、わたしは倒れているダビデの仮庵を起す。その破れを繕い、その廃墟を起し、昔の日のようにこれを建て直す。」(アモス書 9:11、新改訳 2017)ということばが成就します。

●次回は、旧約聖書に預言されている「千年王国」(メシア王国、神の国、天の御国、キングダム、神の支配)の祝福について取り上げる予定です。